

生命の謎は「タンパク質」で読み解ける!

白木賢太郎(著)(メディアファクトリー)(2009年10月刊行)

毎回綱渡りのこの書評欄(ニュースレター全体が綱渡りという話もあるが・・・). Venter, 太田朋子さん, など本特定領域には直接関係のない本でしのできたが, 今回は本特定研究にも関係した正統派, しかも昨年秋に出たばかり, の一冊を紹介したい.

著者は気鋭の「タンパク質学者」である筑波大学准教授の白木賢太郎博士²(本特定領域研究評価者の後藤祐児さん(阪大)のラボ出身). 白木さん自身は, タンパク質の凝集を防ぐ低分子化合物の探索などタンパク質を自在に扱う技術の確立に取り組んでいる.

そんなタンパク質学者が単著で書いている本書の主たる目的は, タンパク質科学になじみのない読者層に「タンパク質がただの栄養素ではない」ことをわかってもらい, タンパク質が精緻に機能することが諸々の生命活動に必須であることを理解してもらうことにある. 内容としては, タンパク質のはたらきが立体構造と密接に関わっていることを紹介した上で, 遺伝, 意識, 匂い, インフルエンザ感染, アミロイド・プリオンなど生命にまつわるトピックスをタンパク質の観点から説明し, さらにiPS細胞や人工細胞にまで話は及ぶ. ただ, 本書の目的が目的な

だけにこのニュースレターを読んでいる方々, 特に「タンパク質の社会」関連研究者にとってサイエンティフィックには物足りない内容なのは仕方がないところである³. それより, 随所に出てくる小ネタ(科学行政への寸評, Craig Venterの紹介などなど)を楽しみつつ, 白木さんのタンパク質へのひたむきな「愛」を共感しながら読むのが「タンパク質の社会」な人たちの正しい読み方であろうか.

「タンパク質」の本とは言うものの目次だけを見ると最新の生命科学の入門本と見まごうかもしれない. 読んでいくとiPS細胞やウイルス感染などメディアに頻出する生命現象の裏でタンパク質が活躍していることがよく伝わっていくのだが, 逆に言えば, タンパク質科学そのものでは一冊埋まらないのだな, ということであらためて実感した.

最後に一言. 表紙はDNAの二重らせんのイラストということでタンパク質らしくないですね. 白木さん, いかがいたしましたか?
(田口 英樹)



1. 肩書きは著者自身によるもの. ありそうでなかった呼び方かもしれない. 評者自身は「蛋白質科学者」と自らを呼びたい.
2. 評者個人的に, 白木さんとは蛋白質科学会関連の会合などでときおり会って, いつも楽しいお話を拝聴している

3. 「ゆで卵を生卵に戻せるか」という序章タイトルにシャペロン屋である評者は過敏に反応してしまったが, ClpB(Hsp104)についての記載はない・・・